

座談会

北海道の美術など

出席者

全道展会員、国画会会員
国松 登
全道展会員、独立美術会員
松島 正幸
全道展会員、独立美術会友
柄内 忠男
北海道新聞学芸部 竹岡 和田男
全道展、春陽会出品者
上林 智子
全道展画、画会出品者
朝倉 徳秀
司会 本田 明二



本田 お忙しいところをみなさんご出席下さいましてありがとうございます。ことしも7月20日から28日まで第12回全道展が開催されますが、これを機会に全道展のいままでの歴史と本道の美術界で果たしてきた役割、さらに今後の方向などについてご意見をお聞きしたいと思います。まず会の創設にいちばん苦勞されてやつて来られた国松さんに当時の社会情勢とか、そこから生れた全道展の必然性などもお話ししていただきたい。

国松 全道展が発足したのは終戦の翌年で、当時は作家の応召やら従軍、あるいは交通不便の関係で作家が孤立して全道的な会合があまり行われず、またそれまで道展がかなり長い歴史をもつていたため飽和状態になつていて期待のもてる展覧会の開催が望まれていた。それに中央から疎開していた道出身の作家で、これまで道展に参加していなかつた人たちがあり、そういう人たちを含めた実力作家の集団が必要だという気運が高まつて、専門作家の育成と互いに個々の実力を磨くための場を持つとうという二つの目的から誕生したものです。

本田 大体全道展が始つた当時の話を聞きましたが、全道展は昨年十周年を迎え、戦後の北海道の美術に大きな足跡を残してきたわけです。つきに竹岡さんから美術批評家の立場でこの十年間に全道展の果たした役割をお話し下さい。



国松氏

竹岡 私が見たのは6、7回からで全道展がいろいろなものを生み出す苦しみは見ず、生み出した結果だけを見てきたということになりますが、目的、抱負が抽象的なものであつたにしろ、それはやはり大きな意義をもち、みんな絵を真剣に考えりつばな絵をかき、さらに自分の描いたものを掘り下げようという意欲に燃えている。なによりも大事なことは若い作家たちのすぐれた素質を伸ばしていくことで、この点では全道展は間違いない方向に向つて歩いてきたといえる。そして若い作家はうまい絵をかくようになってきたし、全道展に喜んで出品するようになったことは大きな収穫だし、一般人も毎年よい絵を見るよ

うになつた。

本田 全道展で育つて中央でも囑望されている作家がたくさん出てきていますね。

国松 全道展というものは地方の展覧会としては、水準が高いので、ここで鍛えられた作家は中央でも活躍しています。

柄内 全道展ができたころの絵は他に比して前衛的というか、新しい感じがあつたが、いまは案外そういう感じが消え、ちよつと落ちついたといった時期にありますね。

本田 上林さん、このことについてどうですか。

上林 あまり考えたことはないけれども、全道展全体が大変張りがあつて勉強になるよいチャンスだと思つて頑張つています。

竹岡 東京と北海道との交流が盛んに行われていることは全道展のプラスになつた。

松島 北海道の作家は特長を持つているが、もう少し全体として前進してもらいたい、思い切つてあばれてほしい。うまくまとまつているが、いまは殻を破る時期にきている。意欲のあるところをみせて、どんどん我々を踏み越えてゆくことを期待している。

本田 各地方のものと比べて本道作家の作品はどうですか

松島 質的によいということのみならずよいレベルで、ズバ抜けたものがないということだ。いい作家がひとりでも出てほしいものだ。

本田 それはこれからの大きな仕事として課された使命だと思う。

松島 展覧会そのものの性格がいまむずかしい時期にきているが、全道展の性格はいままでも間違つていなかつたと思う。全道展はみんなの意見を尊重し、時代の流れの

えられたような、そのような認識のされ方ばかりは希望していない。自分らしさを持つということは、一方で孤立する意味も持ち、他方主体性をもつという意味もある。そこにむずかしさがある。

松島 イクリア絵画の強さは彫刻を持つていることだ。日本の絵にはわりつばだが、あれしかないのでは困る。

本田 最後に全道展の今後の役割という事について結論を出したい。

朝倉 その前に道展、新道展の中にあつて全道展は何を特長として持つてゆくかをお聞きしたい。



上 林 氏

松島 どの会よりもきびしいでしょうね。それは制約するという意味ではなく、審査する連中がみんな良心的なので互いの主張について納得するまでいい合い、また作品のよさを買おうとする。それだけに全道展の作家を中央へ出してみたとき、中央でも十分力が持てる。それは自己弁護でもなんでもない。若い作家にとつては、他の会へ行けば相当優遇される人でも、つらい思いをするかも知れないが、どんどん思い切つて自分の仕事をやってくれることを望みます。

国松 特定の傾向、流派に捉われず、広く実力ある作家がどんどん出てくることを期待しています。我々はいちばん高い線を目標において審査している。

朝倉 展覧会の歩み方として、地方の指導を重視するとかいつた、ほかにない方法がありますか。苫小牧にいと顔を合せるものが想定されるので、広くつき合える機会が欲しい。

本田 いままで全道展の仕事は展覧会が第一の仕事であつたが、それはすでに大きな成果をあげたので、これからは全道の絵をかく人たちと会とが直接のつながりを持つて地方の座談会、研究会にどんどん出かけ、また絵の好きな人のレベルを高めるために美術映画や講演会も計画している。

国松 いままで展覧会中心に技量を磨くことに重点がかかつていたが、ほかの会は美術の大衆化に向つていた。しかし、全道展もこの十年間で会の目的を達したので、今後は地方の良識ある人々と交流を進めてゆく。といつても単なる妥協的な親睦は避けたい。

本田 お互いに勉強してゆくつもりだから地方の人もどんどん意見を出すことが望ましい。



本 田 氏

上林 全道展では会員で東京にいる人が多いので、道内では交流の上でも、また明かれることも少ない。作品の上できびしいことはよいが、欲をいえば会場でも会場外でも横のつながりを強くしてほしい。

松島 懇親会の時でも自分の好きな作家のところへ行つて

どんどん批評を聞くと共に自分の意見も主張すべきだ。会の運営について批判してもよい。みんな連慮してはいけない。

国松 道展のように古い歴史をもつた会は出品者と会員との人のつながりがよくできているようにみえるが、全道展も十年たつてお互いに美術について語り合える同士といつた体質が判つてきたと思う。

竹岡 落選者が、どうして落選したのかはつきり納得できるような機会がほしい。

松島 我々も作家だから、悪いところよりもよいところが目につく。よい点を見るようにしているが、入落ギリギリの線で落ちる作品は総合的な力が足りないからだ。

本田 自分でだめだと思うものが入り、よいと思うものが落ちるのは不思議だという話も聞かれるが……

松島 みんなの見る目はたいいて一致している。我々は絵を見る目に自信を持つているから、よい絵を見過して落とすことは絶対ない。

朝倉 会期が毎年はつきりしないが、統一してもらえたらよい。

松島 純粹の展覧会場がなく、デパートでやるために仕方がないことで、了解してほしい。

本田 いろいろ交渉するのだが思うようにいかない。できるだけ努力する。

朝倉 会員の方々の絵はうまいと感ずるが、本当の意味の新しさ、驚かせてくれるような意欲を見せた作品を期待しています。

本田 朝倉さんのいう意味は判ります。会員も勉強しているところを見せてほしいということだと思つて……



朝 倉 氏

国松 出品者にもスタンプがあると思う。会員も同じ作家で、スタンプの時には泣きたくなることもある。そういうとき会員は苦しい気持ちで出しているのだ。だから出品する作品は会員のギリギリのものといえましょう。

松島 作品にはどうしてもムラがでてくる。その中から飛躍する人もあれば、そのまま終つてしまうものもある。それを長い目で育てていくより仕様がありません。

本田 会員も完成されたものではなく、同じ道を歩いているのだ。なかにほとんどない方に踏み込んでゆく人もある。

松島 それを批判してもらふのはよいことだ。

国松 会員を過大評価してはいけない。

本田 出品者も会員もお互いにたゆまず勉強しよう。

朝倉 オスマシのような絵を二点並べるよりも、アトリエの片隅にあるものを一点でも見せてもらえたら……

本田 それでは大変面白い話をいろいろとありがとうございました。これから日本を代表する作家が全道展からたくさん出てくることでしょう。第12回全道展に備えて一生懸命にやりましょう。